慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「日耳曼字十躰いろは」「獨逸捷徑七以呂波」：「七ツいろは」の流れ
Sub Title	"Nanatsu-Iroha" : German and Japanese A-B-C Book
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「日耳曼字十躰いろは」「獨逸捷徑七以呂波」

――「七ツいろは」の流れ――

関場　武

中田さんとは、今はもう店を閉めてしまった三田通りのFコーヒー店に何回か御一緒したことがある。「おごれる者は久しからず」とか、「コーヒーに割り勘で行きましょう」とか、愚にもつかぬ駄洒落で抵抗しても許して貰えず。……それでも、たった一度だけ奢らさせていただいたことがある。その時、話がシーボルトのことに及んだ。「何で君がシーボルトのことなんかを？僕も今、密かにシーボルトをやろうと思っているのだが」と、中田さん独特のややせき込んだ調子の問いに、「イヤ、実は、シーボルトには〝新増字林玉篇 SIN ZOO ZI LIN GJOK BEN〟（一八三四年）とか、〝和漢音釋書言字考 WA KAN WON SEKI SIO GEN ZI KO〟（一八三五年）といった、日本の字書・辞典を改編して石版で刊行したものがあるんです。で、シーボルトが使ったのはどの版かを確認するために、ライデン大学なんかへも行かなくてはなんて思ってるんです」、「それにしても、シーボルトの書言字考、手に入らなくて……」等とお答えしたことを思い出す。今回のこの拙稿は急遽の代役。シーボルトではないものになってしまった。中田さん、お許しを。

「日耳曼字十躰いろは」

一、「日耳曼字十躰いろは」

文久二（一八六二）年洋書調所刊の「官版獨逸単語篇」を嚆矢とする我が国ドイツ語学習書の出版は、翌三年開成所翻刻の「獨逸文典」、明治三（一八七〇）年大学南校版の三部の教科書等を経て、明治四、五年頃、最初のピークを迎える。例えば、「獨逸學入門（Das deutsche Abecebuch oder die ersten Lectionen für die Kinder, welche die deutsche Sprache zu lernen beginnen.）」、「註解獨逸単語篇」、「獨逸単語篇和解」、「獨逸文典字類」といった初等入門書が、明治四年に次々と出され、辞書の世界でも「和字袖珍字書（Deutsch-Japanesisches Taschenwörterbuch）」、「袖珍和字語譯嚢」、「和譯獨逸辭典」の三書が明治五年に、「獨和字典」が同六年にといった具合に、踵を接し刊行されていく。次に取り上げる「日耳曼字十躰いろは」は、その明治四（一八七一）年に出た初等ドイツ語入門書の一つである。まずその書型を記す。

中本　左袋綴　一冊。竪一八・一、横一二・二糎。即ち、

この期の語学入門書に多く見られる判型である。表紙　黒布目地紙。

題簽　子持ち枠付短冊形白紙。表紙中央、上寄りに貼付。「日耳曼字十躰いろは　完」。竪一三・一五、横二・九糎。

前見返し　子持ち枠付黄紙を、中央の欄が大きくなるように縦に三ツ割にし、右に「大櫪逸人著」、左に「東京書肆中外堂發兌」、中央に「日耳曼字十躰いろは」と大きく出す。

柱刻　白口。上魚尾黒。下方に二重の界線を置き、その上に丁付を記す。但し、巻頭の題辞二葉分には丁付ナシ。

丁付　一～十八。丁数　二十丁半。前見返し＋題辞二＋本文十八丁。匡郭　四周単辺。行段　不等。十躰いろはの部分は四行十段。竪一四・九五、横九・五五糎。

刊記　ナシ。但し巻頭題辞の末に「辛未晩春」とあるから、明治四年三月かそれ以降の刊行であろう。

以下、順を追って内容を簡単に紹介する。まず、一オ～二オにかけて題辞（獨逸／字様／辛未晩春／〈印二箇〉）があり、二ウは匡郭のみ。ついで、三オ～六オにかけて「獨逸刊行大字」（所謂〝髯文字〟）、「同草躰」「同小字」「同草躰」、「羅甸首字」（＝ローマ字体大文字）、「羅甸文字」（同小文字）、「獨乙拗韻」（即ちUmlaut）が片仮名の訓を伴って各半丁分宛続き、六ウに大きく「獨逸字／十躰以呂波」と出し、七オから本文に入る。本文は界線で上から「獨逸字」、「羅甸字」、「假名」、「真名」の四段に大別し、その中を更に小分けして、洋字については各々活字体大文字・小文字それに小文字筆記体の三体を示し、「假名」は片仮名、平仮名の二種、「真名」は二種を掲出する。各々濁音、半濁音を含み、イから始まって一六オ二行目のンで終る。次に、同丁本文末右半分に「子母五十韻字」と題を立て、ウに母韻、子韻を例示し、十七オから十九オまで、三行五段に分けて濁音・半濁音を含む五十音図を小文字筆写体、片仮名訓付きで示す。十九ウから終丁ウが「Grundzahlen 基数」で、一～十三、等（ヱト　ツェトラア et cetera）、二十、三十～千、萬、零

までを、ローマ数字、アラビア数字、ドイツ語（筆写体、片仮名振り仮名付き）、漢数字の順に示す。以上、要するに、本書は、次にあげる同じ明治四年晩春刊の「獨逸捷徑七以呂波」と非常によく似た内容・体裁のもので、その先後は遽に決定し難い。

なお、本書の綴りや付訓には、曖昧かつ不正確な個所が若干見受けられる。例えば、C, Z をチェー、チェットと発音したり、Ä, Ö, Ü をアェー、ヲェー、ウェーと表記したり、30、40、70をドウイチツク、フュールチツク、シーベンチツクとする類である。これは、この期の、この手の通俗語学学習書に共通のことで、書き手や彫り手、それに編著者までも、洋語に不案内なことから来ているものである。

二、「獨逸捷徑七以呂波」

まず書型を示す。

中本　左袋綴一冊。表紙　橙色布目地紙に紗綾形模様空押し。

題簽　表紙中央上寄り。子持ち枠付短冊形淡黄紙。「獨逸七以呂波　全」。

扉　匡郭内中央に「獨逸捷徑七以呂波」と書名を大きく出し、右上に「森田靖之著」、左に「東京　文苑閣發兌」と記す。ウには「明治四／年辛未／晩春刻」の大形朱印記を刻す。

柱刻　白口。界線を置いて下方に丁付のみ。丁付　扉にはナシ。二～三、一～二十

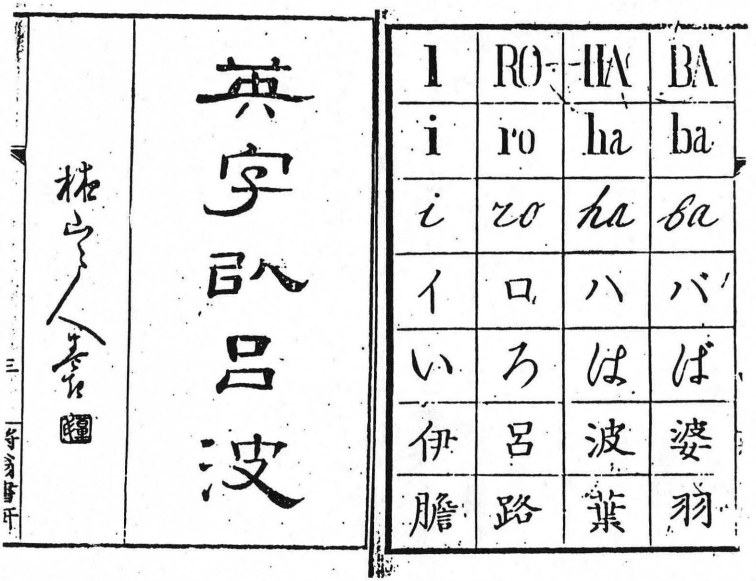
丁数　二十三丁（扉一＋序二＋本文二十丁）。

刊記　終丁ウ本文末右側に右から「日本橋通十軒店／鈴木喜右衛門／明治四年辛未晩春／丹波　森田靖之著」とあり。

匡郭　四周単辺。行段　不等。本文部分は四行七段。巻頭の序文は次の通り。

世に英学又は佛学七ツ以呂波なと謂ふ書どもありて、児輩の初学の捷徑となれり、予も又、彼二書にならひて獨逸の文字を編てよと、人の勸の黙止し難けれは、漫然として領ひつ、更に字音を参考し誤闕を補正するに至りては、東西轍を一にせざれは、圓器方底なるも多かり、加之、予は又短才魯鈍なれは、木を以て竹に継るか如く、具眼の誘を甚麼にせん、尓とて已べき事ならねば、憶を重ね筆を舐りつ、稿終るの後、獨逸七ツ以呂波と名けて、以て書賈に與ふるになん、遮莫、拙き禿筆には杜撰のみ多かるを、其を今更に人並顔なる、烏滸とや誰か咲わさるべき、世に羨しからざるは、人真似する偽所為なりけり　明治辛未の春月　丹波　森田靖之しるす

右の書型と序文から判るように、本書は慶応三（一八六七）年の「英学七ツいろは」、明治三（一八七〇）年の「佛學七ツいろは」の跡を追うもので、また「日耳曼字十躰いろは」によく似る。内容は、はじめに活字体の髯文字アルファベットを大文字と小文字に分けて示し、次に筆記体を同様に出す。次いで六オ～七ウにかけて、「數字 Grundzahlen グルントツァーレン」を一～百万まで、洋数字、振り仮名付きドイツ語活字体、漢数字、筆記体の順に四通り示す。そして八オには、「ヲコタラズ　ユカバチサトノ　ハテモミン　ウシノアユミノ　ヨシ　ヲソクトモ」の道歌を、片仮名および髯文字筆写体で記して、勉学を鼓舞し、八ウに大きく「獨逸以呂波」と出して、九オ以下の本文に入る。掲出順は上から活字体大文字、同小文字、同小文字筆写体、片仮名、平仮名、真仮名二種の計七通りで、真仮名二種のうち、後出のものが草書体で示されているところが、英学、佛學七ツいろはや「日耳曼字十躰いろは」と違う点である。また真仮名の字母も上記三書と異なっている個所がある。なお、一八オ～二〇オは、正音、拗音、重音、子音、連合子音をあげ、次いで二〇ウに「子母五十韻」と大きく題を出して、以下A～Foまでを示す。因にC, Zはツェー、ツェット、Üはユー、30、40、70は



「英學捷徑七ツ以呂波」

各々ドライシック、フィールチック、シーブチックと訓んでいる。

なお、明治七年四月刊の「新刻書目便覧」によれば、著者は森田慎齋、値段は十二銭五〔厘〕。

三、「英學捷徑七ツ以呂波」「佛學捷徑七ツ以呂波」

さて、前にもふれた様に、「日耳曼字十躰いろは」、「獨逸捷徑七以呂波」は、共に「英學捷徑七ツ以呂波」、「佛學捷徑七ツ以呂波」を模し生れてきたものである。その「英学七ツいろは」であるが、これは

中本　左袋綴一冊。表紙　紗綾形模様空押し黄色布目地紙。緑青色地紙に渋引きのものもあり。

題簽　表紙中央、上寄り。子持ち枠付短冊形白紙。「英学七ツいろは　全」。慶応義塾図書館蔵本の題簽は桃紅色紙。書名同。

扉　匡郭内を縦に三つに区切り、中央に「英學捷徑七ツ以呂波」と大きく出し、右上に「碧海阿部為任著」、左下に「巴薺園

臧梓」と記す。ウは、中央に大きく「慶應三年／九月本宅／鏤板印造」の篆刻印形を刻す。

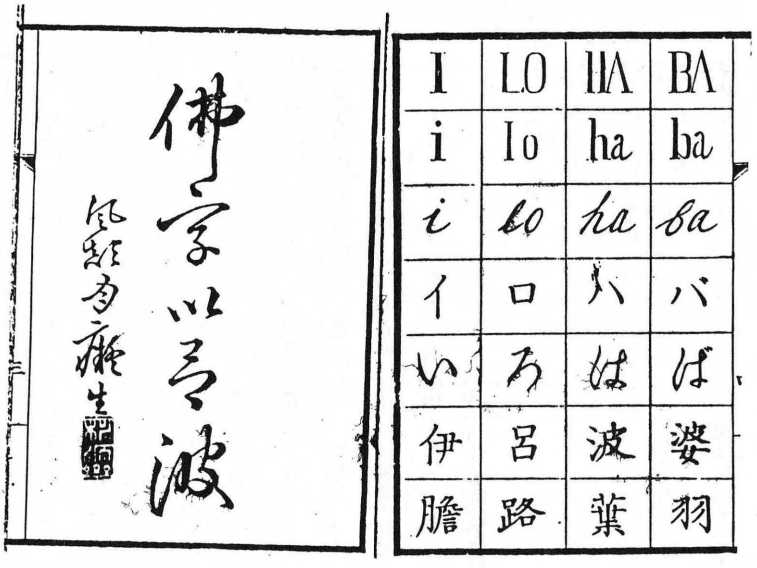
柱刻　白口。上魚尾黒。下方に界線を置いて「將翁書軒」と出し、界線の上方に丁付。丁付　一～十六。扉および序には無し。丁数　十八丁（扉一＋序一＋本文十五丁半＋奥付半丁）。匡郭　四周単辺。行段　不等。七ッ以呂波の部分は四行七段。

刊記　終丁ウ匡郭内を界線で縦に二等分し、左に「慶應三年丁卯仲秋新鐫／碧海　阿部友之進著」、右に「東京書林日本橋通十軒店／播磨屋喜右衛門」とある。そして、後見返し匡郭内の上方に「東京／書林」と出し、右から、「東京日本橋南一丁目　須原屋茂兵衛／同所二丁目　山城屋佐兵衛／同所　須原屋新兵衛／同所四町目　須原屋佐助／同芝神明前　和泉屋吉兵衛／同所　岡田屋嘉七／同所　和泉屋市兵衛／同浅草芽町二丁目　須原屋伊八／同横山町一丁目　出雲寺万次郎／同町三丁目　和泉屋金右衛門／同十軒店　椀屋喜兵衛／同神田橋御門外　伊勢屋安兵衛／同十軒店　鈴木喜右衛門／同南傳馬町一丁目　長岡屋新助」と十四名の書肆を列記し、最後の鈴木と長岡屋の下に「發／兌」と記す。（なお、「大阪女子大学蔵日本英学資料解題」（一九六二・三）にも報告があるが、右の発兌元の部分を削った後印本も存する）。

という書型を有し、

這のいろは。並に楷字。五十韻字等は。英人著述の。日本文法書。又日本辭書より。抄出したる者にして。敢て臆断私意を。以てするものにあらす。然りと雖も。大方君子の高覧に供するに足らす。たゝ僻村遠郷にある。児輩初学の捷径ならんかといふ。慶應丁卯の秋月。　碧海　阿部為任誌　（印二箇）

という序文を持つものである。内容は、まず活字体、筆記体のアルファベットを、各々大文字と小文字に分けて片仮名



「佛捷學徑七ツ以呂波」

発音付きで半丁宛示し、五オは of numbers（付テ　數ニ）」と題し、I～Xまでの数を、アラビア数字、ローマ数字、英語（筆記体小文字、片仮名付訓）、漢数字で記し、末に百、千、零を示す。中には四・フォール、八・エート、百・ホンドルドの如き訓や hunderd の如き誤刻を含む。そして、五ウ右方に「英字以呂波／掖山ゝ人巻記（印「百里／氏」）」と大きく出し、六オ～一五オ一行目までの本文に入る。本文は、活字体大文字、小文字、筆記体小文字、片仮名、平仮名、真仮名（二種）の順に左から四行七段に掲出し、濁音、半濁音を含む。但しバ以下の半濁音には真仮名の掲出が無く、空欄になっている。一五オ右方には「子母五十韻字／静春主人（印）」と大きく出して、ウに母韻と子韻を例示し、一六オ～終丁まで筆記体小文字、片仮名付きの五十音図を示す。七ツ以呂波本文の綴りと比べると、チ CHI—tsi、シ SHI—si、ウ OO—u, wu が異なる。なお、ツ、ヅは tsu, dsu ヂは dsi ラ行の子音はすべてRを採用している。

さて、本書は、かなり刷りを重ねたものと見え、版面の磨滅

が目立つ伝本も多い。盛んに行われた様は、明治四（一八七一）年八月に

起先に英学七ついろはといへる書世に出てより、英學に志すの童蒙、其益を得る亥少からすと雖も、今英國撫良翁子の著せし書によれは、文字の綴續に於て纔僅の差異あり、故に之を更改増訂して、以て世に公にす、是か非か猶後の君子の校正をまつ　明治四辛未歳壮月　松園　橋爪貫誌

とその増訂版たることを謳った「英學捷徑九體伊呂波」[1]が出たり、また明治十八（一八八五）年四月になってもその翻刻版[2]が出たこと等からも十分窺えよう。次にあげる「佛學七ッいろは」も、その影響を受けて出現したものの一つである。すなわちこれは、体裁・内容共に「英学七ッいろは」の跡を追ったもので、英語の部分を仏蘭西語に置き換えれば、そのまま本書となるといった態のものなのである。書型、内容を紹介すると、次の如くである。

中本　左袋綴一冊。表紙　黄色地布目地紙。題簽　表紙中央上寄りに貼付。子持ち枠付桃色短冊形紙。「佛學七ッいろは　全」。扉　中央が大きくなるようにして界線で匡郭内を縦に三ツ割りにし、真中に「佛學捷徑七ッ以呂波」と大きく出し、右上方に「橋爪貫一著」と著者名を記す。左の欄は空白のままである。ウは英学のそれを模して、「明治三年／庚午春月／官許上木」の印形を刻す。柱刻　白口。上魚尾黒。下方に丁付のみあり。丁付　一～十六（扉、序にはナシ）。丁数　十八丁（扉一＋序一＋本文一六＋奥付）。匡郭　四周単辺、行段　不等。七ッ以呂波の部分は四行七段。

刊記　終丁ウ匡郭内を界線で縦に二ツ割りにし、右方に「明治三庚午歳三月／官許」、左に「日本橋通十軒店／東京書林　播磨屋喜右衛門」と出す。即ち英学のそれと同じ版元である。なお、後見返しに、「挿譯英文典自初篇至三篇發兌　全三冊／同　自四編至七編　近刻　全四冊／挿譯佛文典初篇發行　全一冊／同　自二篇至三篇　近刻　全二冊／

英學七ツいろは　全一冊／佛學七ツ伊呂波　全一冊」の六点の広告あり。

序文は「英学七ツいろは」のそれを一部手直した形で、次の様にある。

這のいろは並に楷字五十韻字等は、佛人著述の日本文法書又日本辭書より抄出したる者にして、敢て臆断私意を以てするものにあらす、然れは、大方君子の高覧に供するに足らす、たゝ僻邑遠郷の児輩をして、初學の捷徑ならん事を希になん　東京　桂洲騰園（印）」

内容は、まず活字体、筆記体のアルファベットを、大文字・小文字に分けて片仮名の訓付きで各半丁宛計二丁分に示し、次に数字を英學のそれの如く掲げる。因に訓は一・ヲン、三・トロアー、七・セフト、十・ヂスの如くである。次いで五ウに「佛字以呂波／風顛月癡生（印）」と大きく出して、六オ～一五オ一行目までの本文に入る。四行七段の掲出順は英學のそれと同じで、二種の真仮名の字母も同じである。但し「英字以呂波」では、パ以下の半濁音に真仮名の掲示が無かったが、本書では全て入れてあること、ラ行はRではなくLを使用している点等が「英学七ツいろは」と違う点である。なお、一五オ右方に「子母五十韵字／桃源釣徒（印）」と出して、ウに母韻、子韻、一六オ～終丁オまで筆記体小文字、片仮名付きの五十音図を出すのも英字と同じであるが、その綴りは七ツ以呂波の部分と完全に対応している。ハ行は HA, FHI, FHOU, HE, FHO, チ、ヂは各々 THI, DI と表記している。(3)

邦人によるフランス語学習の成果は、茂亭村上英俊の「三語便覧」（嘉永七〈一八五四〉年序刊）に始まり、「洋學捷徑佛英訓辨」（安政二〈一八五五〉年）、「佛語明要」（元治元〈一八六四〉年）等の一連の著作や、桂川甫策の「法蘭西文典字類」（慶応三〈一八六七〉年）、「英佛単語便覧」（明治元〈一八六八〉年）その他が次々と上梓される等、明治三年の時点では獨逸語のそれより相当進んだ状況にあった。が、本書が英字のそれを模倣していることに象徴されるように、英

語にはやや及ばずといったところであった。因に、ドイツ語だけでなく英語、フランス語とも、初等入門書、学習書類の刊行は、明治四〜六年にかけて最高潮となる。

なお、「英學捷徑七ツ以呂波」の著者碧海、友之進阿部為任は、同じ月に父櫟斎阿部喜任の「繪入英語箋階梯」を校訂刊行し、また、明治十八年十月に豊和堂から「英和じざい」、「英和筆のはじめ」、「英和五體名頭」を出し、同十一月に大寶堂から「英和幼画解（をさなまとき）」を出しているが、(4) 安倍為任なる人物と同一人とすると、明治九〜十一（一八七六〜七八）年にかけて、「日本外史字引大全」、「新選物品識名」(5) といった字引類や、「開化用文」等の往来物を十五、六点程出しているということになる。一方、「佛學捷徑七ツ以呂波」や、「英學捷徑九體伊呂波」の編著者橋爪貫一は、明治三年〜十年代にかけて巾広く啓蒙的な著作をものした人物で、洋学関係では「佛語自在」、「英字三體苗字盡（EIHGAKU MIYAUJI DSUKUSHI）」、「童蒙暗誦英語往来」、辞典関係では「新撰漢語字林大成」(6)、「訓蒙康熙字典」等、それに「小學讀本」や「単語篇」といった教科書類を含め、都合四、五十点程編集・刊行している。

四、「七ツいろは」

さて、右に見た英学、独逸、佛学の各七ツ以呂波には、もとになった書物がある。江戸期の往来物「七ツいろは」である。「七ツいろは」は、江戸時代前期、明暦三（一六五七）年八月に刊行されたものをはじめとし、以後幕末に至るまで版を重ねて行く。単独版以外にも、諸種の往来物を一本に収めた所謂合書型往来の中に収載されたり、江戸期を代表する辞書の一つである開板節用集類の付録に、「三体いろは」、「五体いろは」等と並び屢々採用される等、盛んに行われていくのである。今、手近のものの中から三、四点あげてみる。

（A）天保十年　山口屋藤兵衛版

中本　一冊。竪一七・八、横一一・九糎。表紙　縹色無地紙。

題簽　表紙左肩。飾り枠付短冊形白紙。上に「古文字／真行草／正誤改／令再板」と四行に分けて角書きがあり、界線を置いて下方に「七ツいろは」と大きく題名を出し、左脇に小さく「山口屋藤兵衛板」と記す。竪一三・四、横五・八糎。

内題　前見返し上方に「七字以呂波」と篆書体、右横書きに記す。

柱刻　白口。上方に「七字いろは」、下方に丁付。丁付　一～七。前見返しと奥付にはナシ。丁数　八丁（前見返し＋本文七丁＋奥付）。匡郭　四周単辺、頭書欄あり。行数　本文部分は有界五行。

刊記　後見返し貼付の奥付左下方に「天保十巳亥年六月吉辰再刻　直綱書画／東都地本錦繪問屋　錦耕堂　馬喰町二丁目　山口屋藤兵衛」とある。本文は「い」～「京」。数字は一～十、百、千、万～京、垓～正、載、極。前見返し内題下方を二段四行に分け、「諸行無常　いろはにほへとちりぬるを　色匂散奴流」～「寂滅為樂　あさきゆめみしゑひもせす　浅夢不レ為レ醉」のイロハ歌を掲げる。そして、一オには

空海は、讃州佐伯氏直のおん子也、二十歳にて出家し、天下の博識となり、入唐あり、口・手・足に筆をとり、一時に五字を書給ふ、よつて五筆和尚と称す、今の世に傳へて大師流と仰く、承和二三月廿一日に高野山入定、有弘法大師と号す

という説明を付けて、手、足に各二本、口に一本を咥え、五本の筆を揮わんとしている空海の姿を描き、一ウから本文に入る。付録は、「いろは略解」、「男女名頭相性」、「墨移秘傳」、「偏冠構字盡」、「十幹兄」、「十二支弟」、

弘化２年錦森堂版「七以呂波」・巻頭

「五音五性假名（ごいんごしやうのかな）」の七種。

（B）弘化二年　森屋治郎兵衛版

中本一冊。表紙　標色無地紙。

題簽　表紙左肩。飾り枠付短冊形白紙。上に「改正」と角書き。界線を置いて下方に「七ツいろは全」と大きく書名を出し、右に「諸用調法」と小さく記す。下方には「版元」の二字に挟まれて森治の商標。竪一三・七、横四・九糎。

内題　一オ初行に「七以呂波（なゝついろは）」。柱刻　白口。七ついろはの部分は、上方に二重界線を置いてその下に「いろは」、付録の部分は、界線ナシで「国つくし」、「名頭」。下方に丁付。丁付　二～十二。前見返し、奥付にはナシ。丁数　十三丁（前見返し＋本文一二＋奥付半丁）。匡郭　四周単辺。七ツいろは、国尽しの部分は有界五行、名頭字は八行九段。

刊記　後見返し付録末左方に「弘化二巳年十月再刻／東都馬喰町二丁目　森屋治郎兵衛版」とあり。

書林　錦森堂

本文は「い」～「京」。数字は一～十、百、千～兆。

前見返しに、梅と松ケ枝を背に上畳に座する衣冠束帯の菅公の姿を描き、上方に

菅丞相は北野天神の御事なり、諱は道實、字は三、故に菅三と申、其聰明高才、事跡、古典の載る所、牧挙するに遑あらず、存には塩梅の臣となり、亡には風月の神となり、延喜元年正月廿九日に左遷、同二年二月廿五に安楽寺に於て薨じ玉ふとぞ

と記す。

付録は、「七以呂波」の後に「日本國盡并郡付」五丁分、「名頭字」一丁分を入れ、それに奥付に「十二時知事」を記し、計三種。

（C）嘉永三年　和泉屋市兵衛版

中本一冊。表紙　A、B本と同じく縹色無地紙。

題簽　表紙左肩、飾り枠付短冊形淡香色紙。上方に「新刻」と角書き。その下に二重界線を置き「両點七ツいろは」と大きく外題を出し、その下に「泉市」の商標。竪一三・九、横六糎。

内題　前見返し子持ち枠付匡郭内に「嘉永改正一両點真書入七いろは」とあり。

柱刻　白口。上方に「七いろは」、下方に丁付。丁付　二～八。前見返しには柱刻ナシ。奥付には「七いろは」の柱題あれど、丁付は未詳。丁数　八丁（前見返し＋本文七＋奥付半丁）。匡郭　四周単辺。行数　本文は有界五行。

刊記　後見返し貼付の奥付、付録末左方に界線を置いて、「嘉永三年庚戌初夏吉辰／東都書肆　甘泉堂芝神明前三島町　和泉屋市兵衛板」とある。

本文は「い」～「京」。数字は一～十、百、千～兆。

前見返し内題左方に、梅ヶ枝の下、牛に乗る衣冠束帯の菅公の像を描き、その上方にB本とほゞ同文の伝を載せる。付録は、十幹、十二支、片仮名以呂波、五音を五性ニ相生の叟、偏冠構字集、十二月之異名の六種。

（D）千金七以呂波

半紙本一冊。「七ツいろは」は、大半がA～Cのような中本型で、美濃判は明暦版等初期のものに二、三、半紙本は江戸中期以降の上方版を中心に数本存する。竪二二、横一五・五糎。表紙　香色無地紙。

題簽　表紙左肩。飾り枠付短冊形白紙。「千金七以呂波全」。竪一五・八、横四・一糎。

内題　二オ本文初行に「千金七ッ以呂波」。

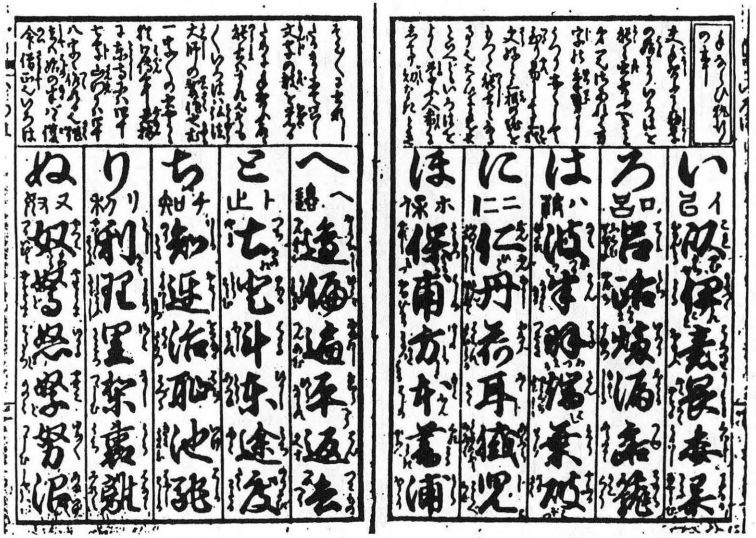
柱刻　白口。上魚尾黒。そのすぐ下に「七いろは」。下方に重線を置き丁付。見返しは柱の一部を黒く塗る等少異あり。丁付　前見返しにはナシ。壱～十了。丁数　一〇丁（前見返し＋本文九丁半）。匡郭　四周単辺。頭書欄あり。

行数　（本文）有界四行。

刊記　後見返し付録末左方に刊行年月及び書肆名を刻してあったと思われる欄があるが、管見に入ったものは下方に「板」と「小林氏」の印刻を残し、他は削られている。

本文は「い」～「京」、数字は一～十。付録は、まず前見返しと一オに見開きで竹林の七賢の画像を描き、頭書欄に「文字。筆。硯。紙。始りの事」と題し、各々その由来を記し、一ウに「朝鮮國之以呂波」、頭書に「平安城禁裡御門」の絵。以下、「大日本國づくし」、「古文偏冠盡」、「男女相性名頭」、「相性の叟」、十干、十二支、「暦中段善悪の事」、「不成就日」の計十一種。

以上あげた四本の間でも掲出の字や音訓等に多少の異同があるが、七ツいろはの本文はイロハ各々に相当する字音を



弘化２年三河屋版「新刻両点七以呂波」

有つ漢字（真仮名、万葉仮名）を、イロハの見出し標目と共に行草体で合計七種掲げるのが基本型で、それが「七ツいろは」と称される理由となっている。最初のイロハ分け標目は平仮名で示されることが普通であるが、その脇や下方にその母字の篆書体を併出することが多く、また

己伊畏意委吴以呂路
慮炉漏露呂波半羽端破
者波（D本）

という具合に、掲出の漢字（真仮名）の両脇に各々別の訓や音を施す所謂両点形式を採っていることが通常である。すなわち、C本や「新刻両点七伊呂波」（弘化二〈一八四五〉年五月三河屋甚助板）のように外題に「両点」を謳う所以である。また、同じ両点形式でも、見出しの行草体の真仮名の左傍に真字体（楷書体）を併記し、それに別の音訓を付す所謂二行両点形式を採っているものもある（例えば「両点真字七ツいろは」江戸末期、文江堂吉田屋文三郎板）。なお、七字分宛あげるのは、京でも一～十までの数字の部分でも同じである。右にあ

げた四本間の異同を若干示すと、音や訓の少異のほか、例えば、

「あ」A、B、C本・あ（安）安阿愛悪庵下――D本・あ（安）阿愛哀庵案安　「京」A、B、C・教敬鏡経恐凶――D・経教鏡輕敬兄　「三」A・參筭産山讃桟――B・參筭産山議殘――C・參筭産山讃殘――D・參衫山殘淺潜　「八」A・鉢蜂跋髪發伐――B、C・鉢蜂跋髪發笵――D・捌法鉢撥髪笵

といった具合で、この四本に限って言えば、ABC三本とD本との間で対立が見られるようである。但しその先後は遽に決定し難く、後考を俟つこととする。なお、イロハ分けの門標たる第一字目の平仮名の字母も、それに添えられている真字や篆字から推測すると若干問題を含む。例えば、「へ」は今日「部」の旁の「阝」の草書体から来たものとされるが、Aでは「皿」、B・Cは「邊」、Dは「並」を出す。「と」はAの「止」が正しいが、B～Dは「土」、「る」はA～Cの「留」がよく、Dの「累」は間違い、「ゆ」もA～Cの「由」がよく、Dの「油」は駄目。それに対し「こ」はDの「己」が正しく、A～Cの「古」は不適といった具合である。(7)

五、「頭書洋語七體以呂波」

さて、以上見て来た「七ツいろは」を部分的に手直しし、アルファベットに置き換えて行けば、それはそのまま英字や独逸、仏学の七ツいろはになる。往来物の「七ツいろは」の盛行を背景に、それを応用した阿部為任の「英學捷徑七ツ以呂波」あたりが切っ掛けになって、色々な横文字以呂波が出て行くのである。紙幅も無いので簡単に紹介すると、例えば

（イ）「頭書洋語七體以呂波」がある。

中本　右袋綴一冊。外題　共紙表紙に藍刷りで「通商洋字便覧／頭書洋語七體以呂波／積玉堂藏板」とあり、内題はナシ。刊記　終丁ウ匡郭内右側に「明治三年庚午仲冬上梓／江東　齊藤健之允訂」、界線を置いて左に「東京書肆／日

本橋通四町目東横町／松坂屋金之助」と記す。柱刻　白口。上魚尾黒。下方に丁付、さらに二重の界線を置いて下方に「江東精舎」。丁付二～十七。表紙共全一七丁で、巻頭に、蒲茶色刷りの次のような序文がある。

方今洋学しきりに　行て、大人君子蛍雪の勉強して、已ニ萬國の文字・事實に貫通せり、然るに市區の　輩、志　有といへとも、学に暇なし、予これを傷むこと久し、今幸ひ洋人に詫て字意を譯し、七ツいろはを字形に彰し、また鼇頭して、数の聲、洋語を挙て、専らに通商の便ならしむといふ　明治三庚午仲冬　江東　齊藤真英識（印二箇）」

本文のうち、活字体、筆記体の大文字・小文字アルファベット表、数字、七ツ以呂波、五十音図は、「英学七ツいろは」をほゞ踏襲している。外題や序文に謳うように、本書の特色は七オ～十四オに至る「異人語早學」にある。すなわち、まず「異國奉行」としてコンシュル、ミニストルをあげ、「異人官名」、「金銭勘定の事」と並べ、次いで「日ヲそん、月ヲむん、星ヲすたある」～「らいでんぐ　物をかく、らいでんくぶつか　書もの、あじゆだん　いくさ大将」に至る日英対照語彙を掲げている部分がそれである。「地震　ゑれすくい、火　ふはや、水　おわた、男　べるそめん、めしくうを　ちやぶ〳〵、いぬ　どうけ、きにいらぬ事を　ぺけ、じやまになるを　ぺけ、やすみ日を　どんたく、よるないた、ねだんをきくことを　はまち」等、怪しげなものも含め少しあげてみたが、英語以外の言葉も含み、相当なシロモノである。ただ、先の「はまち」や「おきる　けたつぷ、あさ　もふねん」のような上手い表音も中にはあり、また、本書だけを見ると噴飯物の感もするが、これらは幕末～明治初期にかけて行われていた一枚刷りの異人語早学・英吉利言葉の類や、異国風俗・人物を描いた浮世絵中に屢々見られる異人言葉等に共通するもので、その水準からすればそう捨てたものではない。なお、「大阪女子大学蔵日本英学資料解題」によると、本書は同年同月刊の「異人語早学七体いろは」の改

題本の由である。とすると、その刊行も或いは明治三年十一月より少し下るかと思われる。その他、巻頭に色刷りの「條約萬國旗章圖略（ばんこくきしやうづりやく）」を載せた（ロ）岩崎茂實著「英和いろは」（中本左袋綴一冊。二十三丁。明治七年十月　東京　甘泉堂和泉屋市兵衛板）、折り本の（ハ）「和英十體以呂波」（明治五年二月　東京　吉田屋文三郎板）、明治六年五月刊の（ニ）「世界字盡五體伊呂波（横文字世界字盡　英吉利、法朗西、獨逸、魯細亜、和蘭五體伊呂波）」（中本右袋綴一冊。二十五丁。東京　山静堂山崎屋清七板）等、取り上げるべき書も多い。一方、「両点繪抄七ッいろは」や「真字國音十二いろは」（明治二十年三月刊）、「習字兼用十體いろは」（大正六年十月刊）等を含めて、江戸期の往来物としての「七ッいろは」の流れも辿らねばならない。それらについては、いずれ稿を改め報告することとしたい。

註

（1）中本左袋綴一冊。表紙　黄色地紙に紗綾形模様空押し。題簽　表紙中央、単枠付短冊形白紙。「英学捷徑九体以呂波　全」。前見返し　青色紙。界線で縦に三つに区切り、中央の欄上方の枠内に JAPANESE AND／ENGLISH ALPHA-／BETS IN NINE DIF-／FERENT FORMS. の英文タイトル。その下に「英學捷徑九體伊呂波」と大きく記し、右欄上方に「橋爪貫校訂」、左欄に「東京　青山堂梓」と出す。柱刻　上魚尾黒、「九体以呂波」。下方に○印を置いて丁付があり、その下に二重の界線を置く。丁付　一～二十一。丁数　二十一丁（二十一オまで本文、ウは広告）＋奥付。刊記　後見返し貼付の奥付を縦に二ッ割りにし、右上方に「官許」、左に「東京書林　小石川大門街／鴈金屋清吉發行」と記す。後印の一本はそれとは少し異なり、後見返し匡郭内に、上部に「發行／書林」と出し、その下に右から、「大坂心斎橋通ッ　伊丹屋善兵衛／仝所　敦賀屋九兵衛／東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛／仝二丁目　山城屋佐兵衛／仝所　須原屋新兵衛／仝芝神明町　岡田屋嘉七／仝所　和泉屋吉兵衛／仝横山町三丁目　和泉屋金右衛門／仝浅草茅町二丁目　須原屋伊八／仝下谷數寄屋町　岡村屋庄助／仝本町三丁目　上州屋宗七／仝日本橋四日市　和泉屋平兵衛／仝小石川大門町　鴈金屋清吉板」と計十三軒の書肆名を列挙する。広告は、「世界商賈往来橋爪貫著第一編／漢語捷徑橋爪貫校第一編／鼇頭史畧字引橋爪貫輯録全一冊」の三点の、内容案内付のもの。九体とは、英字アルファベットが、大文字活字体二種（一はゴチック）、小文字活字体、筆記体小文字の四体。和字が片仮名、平仮

名、真仮名、同草書体、同篆書体の五体。五ウ上方に THE ALPHABETS OF JAPANESE AND ENGLISH. と出し、下右に「英字以呂波」、左に「桃山人書」として、六オから本文に入る。一五オまでの本文で原本の七ツいろはと異なる点は、書体数のほか、ヂ、ツ、ヅが Ji, tsz, dz であること、鼻濁音を示すためかガ行音が HGA, HGI, HGU, HGE, HGO となっていること、ス、ズが SU ZU から SZ DZ になっていること等である。数字は「亜刺比亜數符」と「羅馬数符」に分けて大巾に増補しているが、発音の方は Five, Eleven, Thirteen, Twenty, Thirty の如くであまりいただけない。なお、序文に言う「英國撫良翁子の著せし書」とは、S. R. Brown の Colloquial Japanese or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese のことであろう。同書は一八六三年に上海の Presbyterian Mission Press で印刷刊行され、その中の Sentences in English and Japanese Colloquial の部分を翻刻・修訂した版が、江戸の望洋書屋から出ている。この江戸版は奥付に「松園橋爪氏藏版　東京礫川　發行書房　青山堂雁金屋清吉」とあり、本書の校訂者橋爪貫〔一〕がその刊行に関わっているのである。

因に、明治七年四月刊の「新刻書目便覧」によると、本書の値段は十銭。もとになった「英學七ツ以呂波」は十銭八厘、「佛學捷徑七ツ以呂波」は十銭。

(2) 袖珍　洋装・洋紙、左袋綴一冊。竪一一・八、横八・四五糎。外題　背黒布貼ボール表紙に紅桃色の紙を貼り、中央に「英學捷徑英字七ツ以呂波」、右に「宮本興晃著」、左に「東京書林　冨山堂發行」と印刷。扉　オモテに「英字以呂波」、ウラに「明治十八年／弐月本宅／鏤板印造」と刻す。柱刻　上黒魚尾の上方に「七ツいろは」の題、下方に丁付、その下に二重界線。丁付　一～十六。丁数　十六丁（扉一＋本文一四＋奥付一丁）。刊記　終丁オに左から、「明治十八年四月廿日御届／同　年　月　出版／日本橋區西河岸町九番地／著者　宮本興晃／日本橋區藥研堀町四十三番地／發兌人　鈴木喜右衛門／日本橋區鉄砲町二十五番地／出版人　高木和助」と記す。「發兌人」の三字は、活字を組み合せて後から捺したものか。また、出版年月の下方に「定價十銭」の朱印を捺す。内容は原版に基いているが、碧海　阿部為任の序文が無く、本文の前に在った数字の部分を一番終りに持って来ている等の異同がある。なお、高木和助は、明治二十四年五月にも、原版を基とし単語等を加えた増訂版の「英學捷徑七ツ以呂波」（中本一冊、仁科静太郎編）を出している。

(3) 因に LÉON PAGÈS の Dictionnaire Japonais-Français(1868)では、ハ行は fa, fi, fou, fe, fo チ・ヂは tchi, dgi と表記。

(4) いずれも、背黒布貼ボール表紙、袖珍洋装、左袋綴一冊。中では「英和じざい」が「英学七ツいろは」に一番近い。外題は青緑色ボール表紙に「阿部為任編／英和じざい／豊和堂發行」。刊記は奥付に左から「明治十八年九月廿一日御届／同年十月出

（5）

板／編者　東京府平民阿部為任本所区原庭丁四十六番地／出板人　同高木和助日本橋区鉄炮丁廿五番地／同扇田豊次郎同区大傳馬二丁目卅二番地」とあり、同ウに定價十銭の朱印を捺す。全十八丁（本文一七＋奥付一）。はじめにアルファベットを各字体で出し、本文は、平仮名、真仮名、片仮名と、英字活字体の大文字、小文字、筆記体小文字の六体。濁音と半濁音（「清音」と称し五体）は別丁に立てる。末に数字、月名、四季、方角の英語を片仮名訓付きで載せる。（序文）此の書は、童蒙等が英文を学び并に綴り易きために記載せしものなれば、初学の輩は、一部つゝは必ず貯へ給ひとしか云ふ　乙酉仲秋　編者しるす」。「専本邦ノ産ヲ擧テ、ソノ漢名ヲ識ヲ主トス」（凡例）という水谷豊文著「物品識名」（文化六〈一八〇九〉年刊）・「物品識名拾遺」（文政八〈一八二五〉年刊）の跡を追って編輯出版された本草・名物事典。中本一冊。竪一八・一、横一二・一糎。表紙　黄色地紙に紗綾形模様空押し。題簽　左肩。子持ち枠付雲母入り苔色短冊形紙。竪一三・三、横二・七糎。「新選物品識名　安倍為任編輯　全」。前見返し　雲母入り鶯色地紙。子持ち枠内を重線で縦に三ツ割りにし、中央に「新選物品識名　全」と大きく書名を出し、右上に「安倍為任編輯」、左に「東京書肆　東山堂發兌」と記す。内題「新選物品識名／安倍爲任編輯」。尾題「新選物品識名終」。柱刻白口。上方に「新選物品識名」、二重界線を置いて下にイロハ分け等。さらに下方界線の下に丁付。イロハ分け等は、各丁オ側に「凡例」、「書目」、「イ」～「ス」とあり。丁付　一、二、一～七十八。丁数　八〇丁（前見返し＋凡例一＋書目一＋本文七八＋奥付）。匡郭　四周単辺。行段　有界一三行二段。

刊記　後見返し貼付の奥付に「明治十年四月廿三日版権免許／同　年六月廿九日出版」、界線を置いて左に第六大區八小區本所松倉町二丁目八十五番地／編輯人東京府平民安倍為任／第一大區六小區通三丁目一番地／出版人同上　竹川藤助」と記す。巻頭に四条から成る「凡例」と、證類本艸、食物本草～博物志、坤輿圖説に至る四六種の書目を掲げた「引書標目」が、各々一丁宛ある。なお、凡例の末に「明治十年六月　編者識」とあり。

本書の項目数は試算によれば三三九四項。凡例に「國字ヲ以テ區別シ、又各部ヲ水、鑛、草、木、獣、禽、魚、介、蟲等ヲ九品ニ區別ナス」あるように、イロハ分け、それも多くは第二音節までを考慮に入れて配列し、その内部を九門、若しくは火門を入れた一〇門（三ケ所、他に「水火」一）に分けている。水谷豊文の原著と重なる項目多いが、「カラノカシラ　犀牛　拂子ニ製スル毛、舶来ス、コレヲカラノカシラト云、纓尾ト云、白キモノヲ白纓（シラグマ）ト云、赤キヲ紅纓（シャグマ）ト云」（加・獣3）、「ボサツイシ　菩薩石　和産未詳　和ニボサツイシト云モノハ、能登鳳至郡ボサツ谷ニ、ボサツイシト云アリ、僧ノ衣ヲ着ル形ノ如クス、又伊吹山ニテ長石ヲボサツイシト云」（拾遺・保・石1）といった原著にあった註や、カキ（柿）にアマボシ、ツルシガキ以下一七種、タケ（竹）にハチク、マダケ以下二〇種といった具合に、見出しに関わる品種を列挙してあった部分は全て削除して

いる。

(6) 中本一冊。(竪一八、横一二糎。香色無地表紙。題簽　表紙左肩。子持ち枠付短冊形白紙。「漢語字林大成橋爪貫一輯全」。竪一二・五、横二・六五糎。前見返し　桃色地紙を子持ち界線で竪に三ツ割り。中央に「漢語字林大成」と書名を出し、右に「橋爪貫一輯　版権免許」、左に「東京書肆　青山堂發兌」。上欄外に「明治九年二月刻」と右から横書き。目録題「新撰漢語字林大成目次」(末に同じ目録題を出し右下に「終」とあり)。内題「新撰漢語字林大成／東京　橋爪貫一編輯」。尾題　書名は同じで、右下に「終」と入れる。柱刻　白口。上黒魚尾の上方に「漢語大成」、下に「序」、「目次」、或は本文部分オ側に画数順の見出し。下方に○と重線を置いて下に丁付。丁付　序と奥付にはナシ。(目次)一～九、(本文)一～百四十九。丁数一六〇丁(序一＋目次九＋本文一四九＋奥付)。行段　本文は有界十行四段。匡郭　三周双辺。

刊記　奥付オ単辺匡郭内に、「明治九年二月十四日／版權免許　定價五十錢／編輯者　東京第四大區三小區小石川水道町九番地／橋爪貫一／出版人　東京第四大區三小區同所大門町二十一番地／青山清吉」とあり、ウに、日本橋通二丁目　稲田佐兵衛／芝宇田川町　牧野吉兵衛／芝口一丁目　牧野善兵衛／浅草芽町二丁目　北澤伊八／横山町二丁目　太田金右衛門／神田須田町　太田勘右衛門／横山町一丁目　出雲寺萬次郎／大傳馬町二丁目　大溪平兵衛／下谷數寄屋町　岡村庄助／浅草清島町　山崎勝藏／湯島松住町　別所平七の十一名の「東京／書林」をあげる。

序は漢文体。末に「明治八年十二月念八日、常陸櫻老加藤熙識、松軽櫻井能書(印)」とあり。本文は画引、頭字類聚の熟語字典。一畫・一讀(イヅドク)～二十六畫・〔鬱〕鳴(ウツメイ)(ヒヾキワタル)まで。試算によれば計一一七八〇語。

(7) 因に現在でも「州」か「川」か、或はまた「津」、「門」からか等と揺れている「つ」は、四本とも「門」としている。そのあたりの状況を、幕末、江戸の亀屋文藏・文次郎版の「新撰九字以呂波」は、その序文で、「世に七ツいろはといふもの、数板ありて久しく行るといへ共、何れも誤多くして童蒙の為に益あらず、譬ば、つの字は門の畧なるに門に誤たぐひ、或はいゐ、をお、江ゑのかな違ひ等、かぞへあぐるに暇あらず」云々と言っている。東都文江堂の「両點真字七ツいろは」や、大坂天満屋板の「七ツいろは」等は、「津」を採用している。

なお、資料は手近のものを使用したが、一部慶應義塾図書館や国会図書館所蔵本を参照した。小野尚志氏をはじめ、閲覧に際し御世話頂いた方々に深甚の謝意を捧げる次第である。